意識・習慣に関する調査の結果

Benesse 教育研究開発センター
研究員　　野村 徳之

「小学生の漢字力に関する実態調査」は、各学年配当漢字を全て出題し、漢字が実際にどの程度修得されているのかを調査する「漢字テスト」と、国語、漢字、読書等に関する「意識・習慣に関する調査」の二部構成で行った。子どもの漢字力の高低には、彼らの国語や生活におけるさまざまな意識や習慣が影響している可能性があると考えられる。ここからは、意識・習慣に関する調査部分について明らかになったことをまとめる。

65.1%が国語の勉強が「好き」と回答

「あなたは、国語の勉強が好きですか」という質問には、およそ３人のうち２人が「好き」（とても好き＋まあ好き）と答えた（図１）。しかしながら、1年生では74.0%が「好き」と答えているのに対し、6年生ではその比率が59.0%に低下する。目立って「好き」が減少する学年はないが、学年が上がるにつれて次第に国語嫌いが増加する傾向にあるようだ。
男女別に見ると、いずれの学年も女子の方が「好き」の割合が高い。特に１年生女子は、82.9%が「好き」と回答していることが目立つ。これに対して、もっとも低い６年生男子は、51.3%しか「好き」と回答していない。男女の差は、いずれの学年も10%～15%程度ある。

「あなたは、国語の勉強が好きですか」の質問に対して、「好き」（とても好き＋まあ好き）と回答した子どもと、「嫌い」（まったく好きではない＋あまり好きではない）と回答した子どもで、漢字テストの正答率がどれくらい違うのかを見てみた（図２）。その結果、「好き」と回答した子どもの正答率は62.0%で、全体を4.1ポイント上回ったのに対し、「嫌い」と回答した子どもは50.1%で、全体を7.8ポイント下回った。両者の差は、約12ポイント開いており、国語の勉強が「好き」と回答した子どものほうが、漢字力があるといえる結果となった。
学年別に見ても、いずれの学年も国語の勉強が「好き」と回答した子どものほうが、約６～13ポイント高い正答率となった。

図１　国語の勉強の好き・嫌い

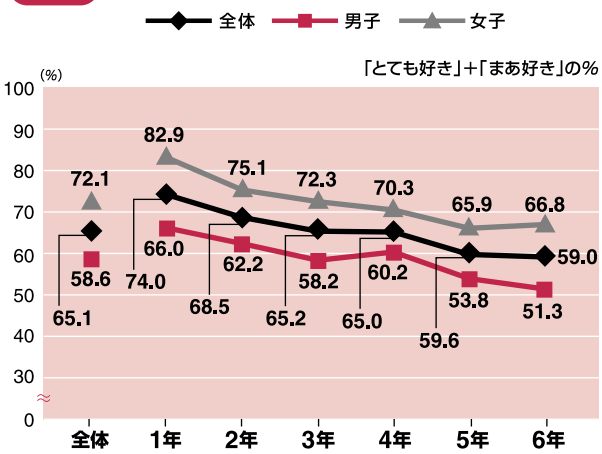
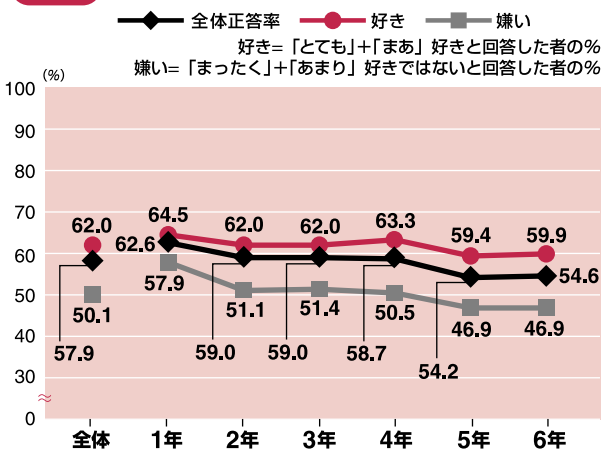


図２　正答率（国語の勉強の好き・嫌い別）



「読むこと」よりも「書くこと」が苦手になる

「あなたは、漢字を読むことが得意ですか」という質問に対し、読むことが「得意」（とても得意＋まあ得意）と回答した子どもは67.8%であった（図３）。1年生では68.4%が「得意」と回答している。2年生でその割合は減少するものの、その後は男女ともに増加に転じている。
「あなたは、漢字を書くことが得意ですか」という質問に対し、書くことが得意（とても得意＋まあ得意）と回答した子どもは53.5%であった（図４）。1年生ではその回答が73.0%と高い割合でありながら、2年生で59.3%に大きく減少し、6年生では40.9%にまで下がっている。学年が上がるにつれて「得意」であると考える子どもは減るようである。

「読むこと」と「書くこと」では、「読むこと」に自信がある子どもが多いようである。「読むこと」が、1年生から6年生まで「得意」と答える比率が変わらないのに、「書くこと」は、学年が上がるにつれて「得意」が減少している。

図３　漢字を「読むこと」が得意・不得意

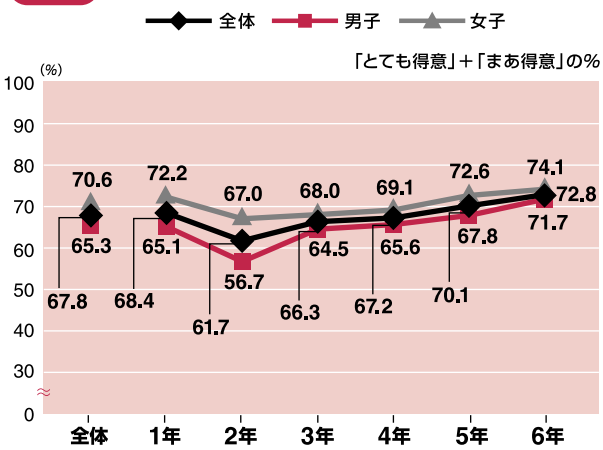
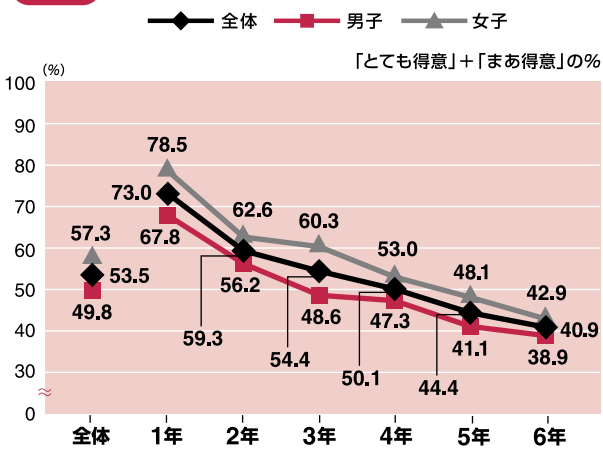


図４　漢字を「書くこと」が得意・不得意



読むことが「得意」と感じている子どもは、実際に書くことも「得意」である

図5は、漢字テストで平均点以上を取った子どもと、平均点未満だった子どもに分けて、「漢字を読むことが得意」かどうかをたずねた結果を示した。数値は、「とても得意」と「まあ得意」の合計を表している。これを見ると、いずれの学年でも「平均点以上」の子のほうが、「得意」と回答する比率が高い。漢字を読むことに対する意識は、実際に書けるかどうかと関連していることがわかる。

図6では、「漢字を書くことが得意」かどうかについて、漢字テストの結果別に示した。ここでも同様に、「平均点以上」の子どものほうが「得意」と答えており、漢字を書くことに対する意識が、漢字テストの得点と相関している様子が表れている。また、学年ごとの推移を見ると、学年が上がるにしたがって、「平均点以上」と「平均点未満」の差が拡大している。「平均点以上」の子どもの「得意」の比率は、1年生81.8%から6年生59.3%まで22.5ポイントの低下である。これに対して、「平均点未満」の子どもは、1年生62.8%から6年生20.3%まで42.5ポイントも低下する。高学年になると、テストの得点の低い子が、漢字に対する苦手意識を強めることがわかる。

図5 漢字を「読むこと」が得意・不得意（平均点以上・平均点未満別）

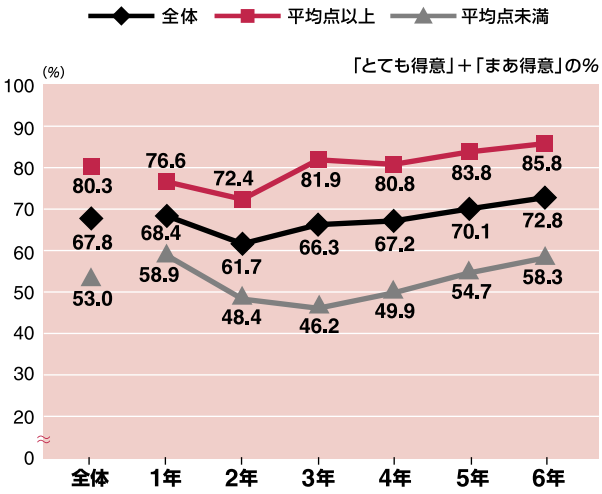
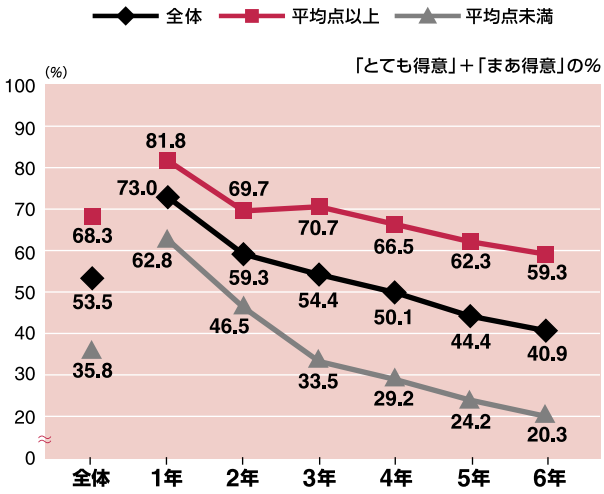


図6 漢字を「書くこと」が得意・不得意（平均点以上・平均点未満別）



81.2%が本を読むのが「好き」と回答

「あなたは、本を読むのが好きですか」との質問に、「好き」（とても好き＋まあ好き）と回答した子どもは、81.2%であった（図7）。女子が85.5%、男子が77.2%であり、女子の方が「好き」と回答した比率が高い。しかしながら、男女共、6年生までに「好き」の比率は緩やかに減少する。

「あなたは、本を読むのが好きですか」の質問に対して、「好き」（とても好き＋まあ好き）と回答した子どもと、「嫌い」（まったく好きではない＋あまり好きではない）と回答した子どもの漢字テストの正答率を比べた（図8）。「好き」と回答した子どもは59.1%だったのに対し、「嫌い」と回答した子どもは52.8%だった。両者の差は、約6ポイント開いている。本を読むことが「好き」と回答した子どもの方が漢字力は高いといえるが、それほど大きな差にはなっていない。

図7 本を読むことの好き・嫌い

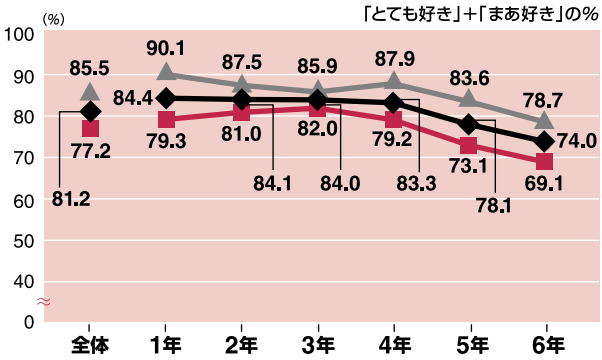
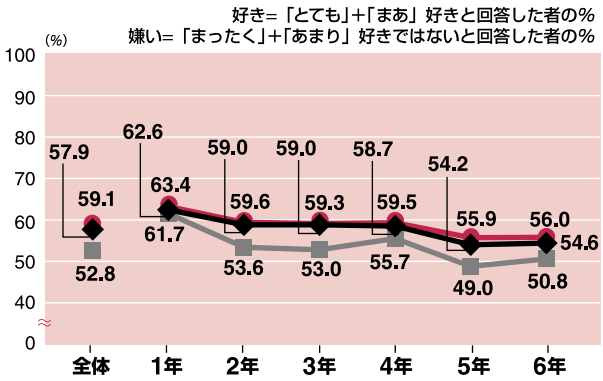


図8 正答率（本を読むことの好き・嫌い別）



読書をしない層は20.3%

「あなたは、家で本（マンガや雑誌以外）をどのくらい読みますか」という質問には、約8割の子どもが読書習慣がある（「週に1冊以上は読む」＋「月に数冊は読む」（2～3冊くらい＋1冊くらい））と回答した（図9）。「読まない」（年に2～3冊くらい＋ほとんど読まない）と回答した層は、全体で20.3%であった。性別では、男子の23.3%が、女子の17.1%が、「読まない」と回答している。男子の方が本を読んでいないようである。

「あなたは、家で本（マンガや雑誌以外）をどのくらい読みますか」の質問に対し、回答別の漢字テストの正答率は「読まない」（年に2～3冊くらい＋ほとんど読まない）と回答した子どもの数値が全体（57.9%）よりも4.5ポイント低い結果となった（図10）。読書の習慣はあった方が漢字力はあるといえるが、読書量と漢字テストの正答率の関係はそれほど強いものではない。読書では実際に漢字を書かないためかもしれない。

図9 読書の習慣

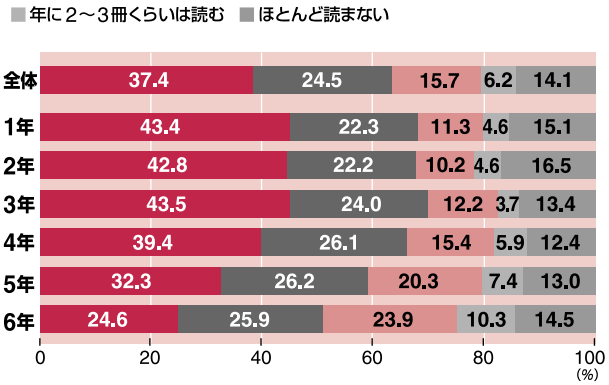
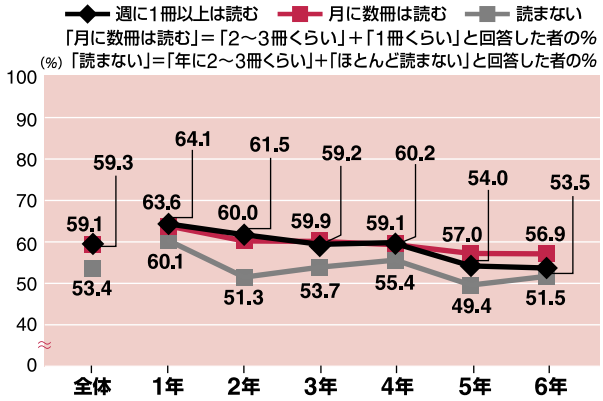


図10 正答率（読書の習慣別）



18.3%が読書中の読めない字を「ほうっておく」

「あなたは、本を読んでいる途中で、読めない漢字があったときどうしていますか」という質問には、「保護者に聞く」54.3%、「学校で先生に教えてもらう」2.0%、「辞書を引く」22.2%、「ほうっておく」18.3%という回答結果になった（図11）。教員を頼る子どもが少ないのは、本を読むことが主に家庭で行われていることに起因するからかもしれない。しかしながら、「保護者に聞く」は学年が上がるにつれて減少し、「ほうっておく」という回答が1年生から6年生で約10ポイント増える。

「あなたは、本を読んでいる途中で、読めない漢字があったときどうしていますか」の質問に対する回答別の正答率は、「辞書を引く」と回答した子どもが61.6%で、もっとも高い結果となった（図12）。正答率は学年別でも全てトップである。「ほうっておく」と回答した子どもの正答率は51.5%で、「辞書を引く」子どもとの差は約10ポイントある。高学年になると、「ほうっておく」と回答した子どもの正答率は50%を切る。日ごろ、辞書を使う習慣が漢字力に関連している様子がわかる。

図11 読めない字の対処方法

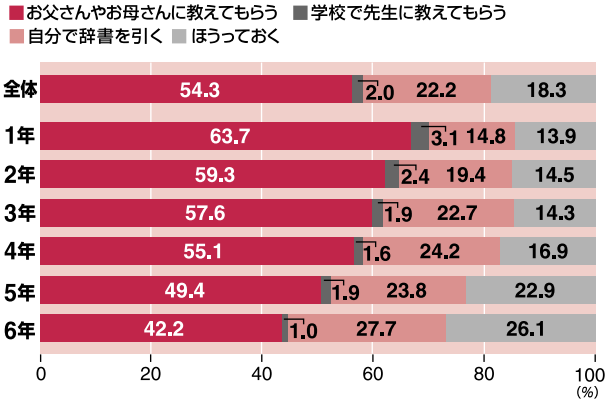
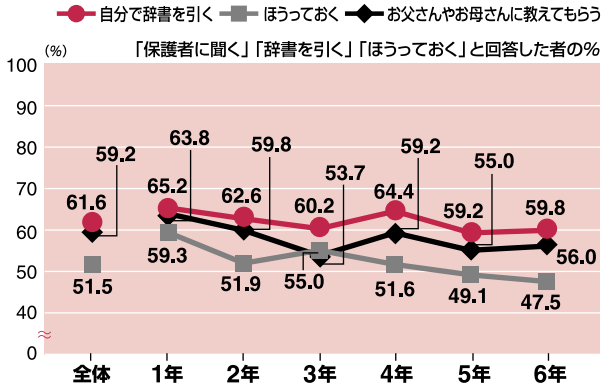


図12 正答率（読めない字の対処方法別）



「国語をとても好き」にさせるには保護者のかかわりが影響する

「あなたのお父さんやお母さんは、家でよく本を読んでいますか」という質問は、「読んでいる」（よく読んでいる+ときどき読んでいる）と回答した子どもが57.9%であった（図13）。

「あなたのお父さんやお母さんは、あなたが小さい頃、よく本を読んでくれましたか」という質問は、「読んでくれた」（よく読んでくれた+ときどき読んでくれた）と回答した子どもが77.4%であった（図14）。「読んでくれた」との回答は、学年別に見ると、女子の方が３ポイントから９ポイント程度、男子よりも多い。

図13 保護者の読書習慣の有無

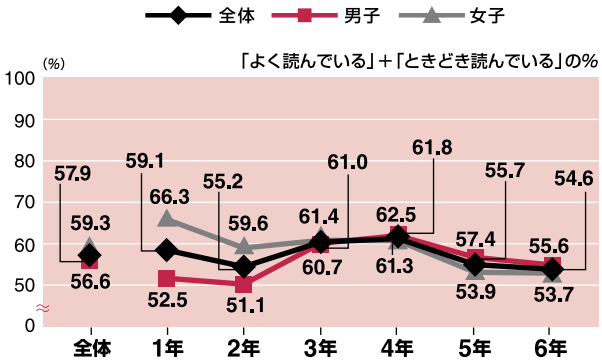
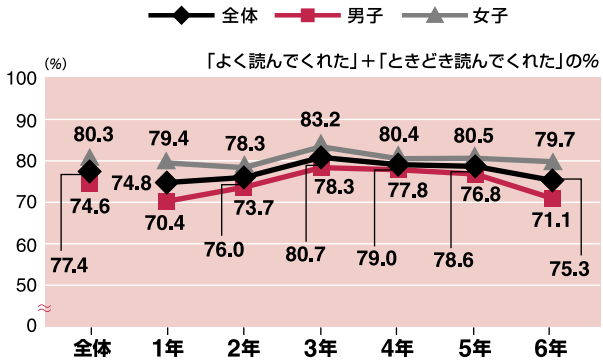


図14 保護者からの読み聞かせを受けた経験の有無



「保護者の読書習慣」の有無をたずねた質問に対し、「読んでいる」（よく読んでいる+ときどき読んでいる）と回答した子どもの漢字テストの正答率は59.3%であった（図15）。「読んでいない」（まったく読んでいない+あまり読んでいない）と回答した子どもの正答率は56.2%で、その差は約３ポイントである。保護者の読書習慣は子どもの漢字力に、わずかではあるが影響する。

「保護者からの読み聞かせを受けた経験の有無」をたずねた質問に対し、「読んでくれた」（よく読んでくれた+ときどき読んでくれた）と回答した子どもの漢字テストの正答率は59.3%であった（図16）。「読んでくれなかった」（まったく読んでくれなかった+あまり読んでくれなかった）と回答した子どもの正答率は53.5%である。その差は約６ポイントあり、幼児期の読み聞かせは、その後の子どもの漢字力に影響するといえる。

図15 正答率（保護者の読書習慣の有無別）

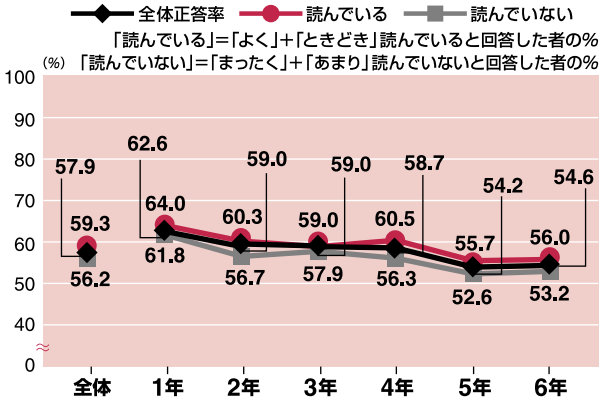
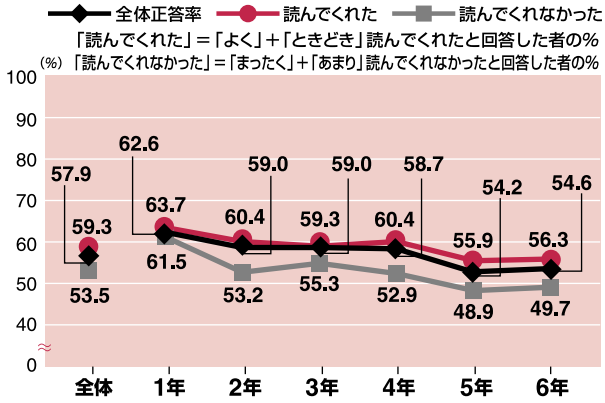


図16 正答率（保護者からの読み聞かせを受けた経験の有無別）



「国語がとても好き」と回答した子どもの68.9%は「保護者が家でよく本を読んでいる」と回答し、同じく87.6%が「保護者がよく本を読んでくれた」と回答している（グラフは省略）。こうした保護者の生活習慣や子どもへのかかわりは、「国語」に対する意識や漢字力などにさまざまな形で影響しているようである。